

Title	アメリカ文化の表現としての”FAMILY PLAY” : THE SUBJECT WAS ROSESの場合
Author(s)	田川, 弘雄
Citation	大阪外国語大学学報. 21 p.111-p.125
Issue Date	1969-03-20
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80355
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

アメリカ文化の表現としての

“FAMILY PLAY”

—THE SUBJECT WAS ROSES の場合—

田 川 弘 雄

Not a few modern American “family” plays reflect aspects of American culture. Among them we find *Death of a Salesman* by Arthur Miller and *Long Day's Journey Into Night* by Eugene O'Neill. Another such “family” play which may serve as a cultural document is *The Subject Was Roses* by Frank D. Gilroy, the Pulitzer winner for the 1964-65 season. Comparing that play with *Long Day's Journey Into Night* I shall, in the following discussion, attempt to examine *The Subject was Roses* as vehicle of Irish-American Catholicism. I shall also try to indicate how certain vital and somehow peculiarly American tensions—such as that of woman's discontent in her marriage role as well as the somewhat broader matter of severe mutations in the nature of the individual's familial relations, are made manifest in the plot-character workings of this play.

1964年度のピューリツア賞を受賞した作品に Frank Gilroy の *The Subject Was Roses* という劇がある。この劇は登場人物三人、父、母、息子の典型的な家庭劇である。三年の兵役を終えて帰還した一人息子を迎えての中年夫婦の心の動きをさりげない会話のうちに描き出している作品である。全く写実的な作品であり、不条理の演劇が人々の関心を呼んでいたときだけに、そのオーソドックスな形式がかえって奇異な感を与えるほどであり、この劇が二年余のロングランを続け、ピューリツア賞とニューヨーク演劇批評家賞をあわせとるとは予想されなかったかも知れない。Edward Albee は私がこの劇についての意見を求めたときに、「あの劇は皆にわかるから」という意味のことをいった。Albee にすれば「観客の好みに迎合して書いたものだ」と皮肉りたかったのかも知れない。たしかに、アメリカの知人達がよく訴えていた両親の関係、親子関係、特に父と息子の関係から考え合わせてもアメリカ人達には自己の問題としてわかるのだろう。だがこの劇が成功をおさめた理由としては、ごく日常的な題材を扱いながら、人間関係に内在する抑圧と失意などを巧みに描き出す劇作術の妙があげられるし、ニューヨーク・タイムズの批評子が “Gilroy's dialogue is so sensitive, so wise.” といっているように生き生きと人々の心を

浮き彫りにする会話の巧みさにもよるのだろうが、それよりも、family drama として典型的なものであり、アメリカ演劇が伝統的に受けついでいる諸要素を包含しているからでもあるだろう。

アメリカ演劇における family drama は O'Neill, Williams, Miller の諸傑作を思いおこせば、一つの伝統的な流れをなしていることは認められるであろう。Arthur Miller などは作家が親子を中心とした家族関係を作品に創りあげるのは当然のことだとして Be it Tolstoy, Dostovsky, Hemingway, you, or I, we are formed in this world when we are sons and daughters and the first truths we know throws us into conflict with our fathers and mothers.¹⁾ といっている。作家は家族関係の葛藤を描くことから出発して、その背後にある社会の認識に迄達する必要があるというのが Miller の意味するところであるし、又彼が作品において実証していることでもある。All my Sons において、Joe Keller が自分の家族のためだけに生きるわけにはいかない。彼も彼の家族も社会の一員であることを悟り、社会に対する連帯責任の認識に達するの、Miller のこの考えのあらわれであり、Death of a Salesman にしても親子の間の争いを描いただけではないことを Miller 自身次のように述べている。

If the struggle in *Death of a Salesman* were simply between father and son for recognition and forgiveness it would diminish in importance. But when it extends itself out of the family circle into society, it broaches those questions of social status, social honor and recognition, which expand its vision and lift it out the merely particular toward the fate of the generality of men.²⁾

家族を描くことによって社会の問題に達する努力は Williams もやっていることである。The Glass Menagerie が単に過去の夢に生きる母親と、息子、娘との確執の劇ではないことは明らかであるし、又 A Street Car Named Desire もややもすれば、psychopathology の考察のように見られるが、ヒロイン Blanche が家(族)の庇護から追い出されて、非人間的な世界で崩れていく姿が描かれているのであり、観客は彼女の崩れゆく原因に、一種の連帯責任のようなものを感じさせられるのである。

O'Neill の作品についても同じことがいえるのである。代表的な例が Long Day's Journey Into Night である。自伝的なこの作品を通して、文化的、社会的な問題が論じられていることは周知の事実である。John Henry Raleigh の言葉を借りるならば、

....the play is very close to being straight autobiography. In another sense it does not matter how close to, or how far from, are the facts of O'Neill's life to the facts of the play, for *Long Day's Journey* is more impressive as a cultural document than it is as an autobiographical document. Furthermore, its distinctive qualities are given, not so

much by family, as by culture, or by family-culture, since the two cannot be separated.³⁾

即ち, Raleigh によると, この劇は家族を扱いながらも, アメリカにおける Irish-Catholicism 文化を表わすすばらしい文献になっているというのである。他にも Long Day's Journey がアメリカ文化・歴史の一断面を表わしているという批評家は少なくない。昨年 The Iceman Cometh の演出に來日した Harold Clurman も東京での O'Neill に関する講演で, この劇に現われている親子の世代の差をとりあげ, 移民と次の世代との差が, この劇には典型的に描かれていて, アメリカ史の replica になっていると述べている。

同様のことは Arthur Miller の作品についてもいえることであって Death of a Salesman に関して Henry Popkin は次のように述べてこの劇の歴史の表現としての意味を強調している。

The anyfamily quality is reflected ... in his obvious intention of making the Loman family history recapitulate the history of the nation. Willy's father used to set out across the continent from Boston; Willy remembers sitting under a covered wagon in South Dakota while his brother Ben went on to look for their father in Alaska. Somehow, this sounds like an improbable origin for Willy Roman, salesman of Brooklyn. The point is, I think, that Willy is not the product just of this family but of the adventurous American past.⁴⁾

Family drama は Ibsen 以来の近代劇の主流をなすものであり, これは Arthur Miller もいっているように, 散文劇と family drama とは必然的に結びつく関係にあるので⁵⁾, 現代の realism 劇では family drama が多いのは当然である。しかし, アメリカ現代劇においては以上述べたように, 歴史の replica という特別の意味をもってくるのである。では Frank Gilroy の The Subject Was Roses には, この要素が含まれているだろうか, いいかえれば, この劇にはアメリカ文化・歴史の表現としての面が見られるだろうかという疑問が浮んでくる。そこでこの疑問点を中心に, O'Neill の Long Day's Journey Into Night と比較しながら, The Subject Was Roses を考察してみようと思う。

1946年の5月, 大戦後のニューヨークの平凡なアパートでの, 土曜日の朝から月曜日の朝にかけての二幕七場が The Subject Was Roses の舞台である。お互に合わないことがわかっていながら, 運命の力によって結ばれた夫婦。父に似たやさしい男を求めているのに全く違うタイプのエネルギーな男と結婚した妻 Nettie。貧困の底から立ちあがりブラジルのコーヒー園の経営で100万長者になることを目指したが, 1929年の恐慌でその夢も消えた父 John。外では快活ではあるが内では気むづかしい父, そして飲みあそばさる夜おそくしか帰らない父に, 母と組んで対抗してきた息子 Timmy。劇はその息子 Timmy が三年間の従軍の後, 帰還した翌朝から始

まる。昨夜の歓迎パーティのなごりを止めるニューヨーク・ブロンクス区の全く典型的な中流アパート。幕あきに John と Nettie 夫婦が食卓についているが、そのコーヒーをめぐる会話から夫婦仲がうまくいかない様子が伺える。寝室から出て来た息子 Timmy は以前に交わぬ父母の争いを察知するが、そこはさりげなく一度出た寝室のドアを音をたててしめて、父母に停戦するひまを与えるほどこの三年間に成長しているのである。父が所用で出ていった後、母と息子は三年間のギャップを埋めようと努めるが、母は息子がもはや「膝の上の我が子」でないことを感じて失望するが、Timmy の巧みな気遣いで普通通りダンスをする迄打解ける。だが仕事を止めて帰ってきた父親が野球見物に息子を連れ出して、母親を又失望させるのだった。その日の深夜、一ぱい気嫌で帰ってきた父と息子は意気投合した様子で、さらに飲み続ける。二人が買ってきたバラの花束を妻は夫からの贈り物だと思い喜び、夫婦は忘れていた愛情をふと思い出すのであった。翌日、何年ぶりかで街の盛り場へ食事に出かけたが、妻はまだ長年の冷い夫婦の間柄についてわけがかりをもち、一寸した感情のもつれから大切なバラをいけた花瓶を床にぶっつけてこわしてしまう。次の朝、気嫌の悪い父親が出ていったあと、息子 Timmy が「お母さんと組んでお父さんと対抗したわれわれがわるいのだ。お母さんがお父さんの夢をこわし、人生を台無しにしたのだ」と母親を責めるにおよんで、母は貯めた小銭をもって家を出てしまう。その夜、十時になっても帰って来ぬ Nettie をいらいらして待つ父親と息子。やがて帰って来た Nettie は「この十二時間は一生で始めてもった自由な時間だった」と平然としていたのだった。翌朝、この家を出てアパート住いをしようという息子を思い止まるように説得する父親。その二人の間に始めて本当に心が通い合い、抱き合い父子の愛情を確認し合うシーンがあり、父の方から Timmy の出て行くのを認めて幕となる。

くどくどと梗概を書いたが、この劇も、O'Neill の Long Day's Journey と同じく夫婦、親子の心の葛藤を描いた典型的な family drama であることは、おわかり願えたと思う。

この劇の父親 John Cleary は、O'Neill の劇の父親 James Tyrone と同じく Irish であり、Catholic である。James と移民者でない点は違うが、共に赤貧の中から苦勞してはい上ってきた人物である。John はその苦しかった幼少時代を次のように息子に語るのだ。

I'll tell you what rough is — being so hungry you begged. Being thrown out in the street with your few sticks of furniture for all the neighbors to enjoy. Never sleeping in a bed with less than two other people. Always hiding from collectors. Having to leave school at the age of ten because your father was crippled for life and it was your job to support the house ... You had it rough, all right.⁶⁾

James Tyrone が息子 Edmund に自分の苦勞を話す言葉と全く同じ内容になるのだ。

... There was no damned romance in our poverty. Twice we were evicted from the miserable hovel we called home, with my mother's few sticks of furniture thrown out in the street, and my mother and sisters crying. I cried, too, though I tried hard not to, because I was the man of the family. At ten years old! There was no more school for me.⁷⁾

James Tyrone も John Cleary も共に十才で学校を止め、一家の支柱として働かねばならなかった。従って苦労なしに生活している息子に、その生活を感謝するように求める言葉使いも同じようになる。Tyrone が “You've had everything — nurses, schools, colleges, though you didn't stay there. You've had food, clothing.” というのに対して John Cleary は “Good food. Good clothes. Always a roof over your head.”⁸⁾ と息子が自分よりも恵まれていることを認めさせようとする。そして O'Neill 劇の父親が息子 Edmund の海外での苦労を a game of romance and adventure⁹⁾ に過ぎないときめつけるように、Gilroy の劇の父親は息子の兵隊としての海外生活を、自分のブラジルにおける孤独な生活と比べて、仲間も多く、アメリカ政府のうしろだてもある恵ぐまれたものだとして高く評価しない。酒にふけり、ケチで、そのくせ、土地や別荘には投資をする点も、又一見熱心な Catholic 信者でありながら深い信仰のない所や、空威ばりするくせに気弱な面もあるなど、全く似ている人物である。

John Henry Raleigh は O'Neill's *Long Day's Journey into Night* and New England Irish-Catholicism と題する論文の中で Sean O'Faolain の *The Irish—A Character Study* などの論を援用して Irish の特性を turbulent, drunken, religious-blasphemous など十項目にわたって挙げ、James Tyrone こそ、Irish の文化的歴史的特質を象徴している人物であると論じているのであるが、この議論はそのまま、John Cleary にもあてはめることが出来る。例えば turbulent という特性について Raleigh は James Tyrone と Edmund との間の次のような会話を例にあげている。

You'll obey me and put out that light or, big as you are, I'll give you a thrashing that'll teach you—!

(Suddenly he remembers Edmund's illness and instantly becomes guilty and shamefaced.)

Forgive me, lad. I forgot—you shouldn't goad me into losing my temper.¹⁰⁾

John Cleary も息子を激しく叱りつけておいてすぐに後悔する点においては James と同じである。“I'm the boss of this house. If you want to go on living here you'll do as I say.”¹¹⁾ と親父風を吹かすかと思うと、翌日には後悔して “If it's what I said yesterday, about me being the boss and you'd have to do what I said—forget it ... I was letting off steam.”¹²⁾

とあやまるといった調子で気分の変化も激しく、不安定な動揺しやすい心の持主である。息子の野球見物に行こうという誘いを断って仕事に出かけるが、気が変ってすぐ帰ってきたり、上機嫌で家族をつれてナイトクラブへ行って大いに騒ぐかと思えば、翌朝は当り散らすなど、turbulent という性質を、John Cleary に見出すことは難しくない。

drunken という点について、前記論文で Raleigh は “In a way the Irish addiction to drinks is a simplifying element in their lives, for this how all problems are met—to reach for the bottle.”¹³⁾ と述べているが、この二つの劇では、いずれかの人物が酒に酔っているか、あるいは、酒について話していない場面を探す方が難しいくらいである。父親が John が酒を好み、息子の帰還を祝っては飲み、意気投合したといっっては飲み、妻の態度に腹を立てては飲みあるくのは、Irish の特性をまさしくあらわしているのであるが、“When I was a kid I couldn’t even stand the smell of bear.”¹⁴⁾ と全然飲めなかった息子 Timmy が三年間の軍隊生活の間に酒の味をおぼえ “Two days—two hungovers. Is that what they taught you in the army?”¹⁵⁾ と父親を嘆かせる迄になるのは Timmy の Irish の一員としての成長を意味しているとも考えられ興味が深い。

J. H. Raleigh のあげる第三の Irish の特性は、宗教に対する矛盾した態度である。この点に關しても、James と John は共通した性質をもっている。James のこの性質について Raleigh は次のように書いている。

The dualism of religion-blashemy likewise runs through the Tyrone family. The father—and this is often true of Irish families—is conventionally pious, without any deep commitment to the Old Faith. He uses his religion in a purely conventional fashion, to blame, for example, the worldly failures of his two sons on the fact that they have both become apostates: “You’ve both flouted the faith you are born and brought up in—the one true faith of the Catholic Church—and your denial has brought nothing but self-destruction!”¹⁶⁾

James の宗教に対する態度は、習慣的なものであって、深い信仰心をもっているわけではない。しかし息子達が宗教から離反していくことを許せないのである。この James と同じように The Subject Was Roses の John もミサに行かない息子 Timmy を叱りつけていうのだ。“Billions of people have believed in it since the beginning of time but it’s not good enough for you ... The Clearys have been Catholics since ... since the beginning of time. And now you, a Cleary, are going to tell people that you’re nothing?”¹⁷⁾ そして息子を “無神論者” ときめつけるのであるが、息子に「お父さんは自分が信じているものが何であるか本当にわかっているのか」と問いつめられると、“I believe in the Father, the Son and the Holy Ghost ... I believe that God created man in his own image ... I—”¹⁸⁾ と教会仕込み

の月並みのことしかいえない。彼が息子を教会につれていきたかったのも、信仰心からというよりも、息子の軍服姿を人々に見せて誇りたいためであった。そして、都合のわるいことがあると、“Bless us and save us, said Mrs. O’Davis!”などと信仰をからかったような照れかくしをいうのだ。この John の神に対する態度は、James の態度とまさしく同じであり、Irish の特性をいみじくもあらわしているのである。

その他 Raleigh のあげる Long Day’s Journey into Night にみられる Irish の他の特性である alternately sentimental and ironical about love, sexual chaste などについても、The Subject Was Roses にあてはまる例を見出すことは困難ではない。

もし、Long Day’s Journey into Night が Raleigh の説くように、New England における Irish-Catholicism の文化をあらわしている劇であるならば、Raleigh の説は The Subject Was Roses にもあてはまるだろう。O’Neill の劇と比べて、Gilroy の劇は劇的密度では劣っていることは否めないが、John Cleary という人物を描くことによって、アメリカにおける Irish 文化の諸特質を描き出した点は認めねばなるまい。

The Subject Was Roses の John の妻 Nettie も Long Day’s Journey の James の妻 Mary と多くの共通点をもった人物である。Mary と Nettie に共通する点は、結婚後も娘時代の生活にあこがれ、実家をなつかしみ、父親に対する思慕の気持から脱却出来ないところに最もよくあらわれている。

Mary は少女時代、修道女になろうと心に決めていたのだが、修道院長の忠告もあって、その決心の堅さを世俗の中に生きて試してみることになった。自分をためす方法の一つとして、パーティに行きダンスもした。だが、ふと運命のいたずらによって皮肉にも美男の俳優 James Tyrone と会い、恋に落ちたのである。しかし、結婚生活は修道院出の少女には荷が重過ぎた。結婚後、彼女は夫にかけて愛人があったことや、酒飲みであることを知った。夫が友人と飲み歩いている間に安ホテルの部屋で独り待っていなければならなかった。その淋しさに Mary は父の家で過した少女時代をあこがれた、Raleigh の言葉を借りると、Always in her mind is the terrible discrepancy between her life as a girl, or her metaphor for it, and her life as an adult married woman.”¹⁹⁾ 即ち、Mary の心の中には、少女時代へのあこがれと結婚生活の現実との矛盾が渦まいていたのだ。

Nettie は Mary と異って修道院に行っていない。しかし、“home”という温い雰囲気のある父の家で過した少女時代をあこがれている点では同じである。Nettie は少女時代、優しい父の庇護のもとで、オペラに行き、音楽を楽しみ、豊かではなかったが文化的な生活をしていった。彼女は父に似た優しい男性を求めていた。その希望に合う求婚者もいた。明日から新しい勤めに出ることになっていた日、公園を歩いていた時に、男の子が投げた林檎の芯が彼女の運命をかえたのだ。その林檎の芯のために目のまわりにあざができた。そのために、初出勤の会社を

休んだ。会社は代りの人を傭うと電話して来た。彼女が得た次の仕事が John と近づく機会を与えたのだ。Nettie はこの男とは“合わない”と感じた。と同時に、避け得ない因縁のようなものを感じた。この男を恐れ、そして心をひかれた。だが、結婚後、この男は外では良いが、内では良い夫でないことがわかった。酒のみで、飲み歩いて夜おそくしか帰らない夫を彼女はアパートで待ち続けた。夫が帰ってくると、おきまりの夫婦げんかだった。彼女は母親の所へ毎日行った。そうでもしなければ夫との生活に耐えられなかったのかも知れない。ともかく Nettie は母親と二日と会わずにいらなかった。家を変えると母親も近くへ呼んだ。母親と離れて住むことを避けるために、夫のブラジルでの事業計画にも、別荘を買うことにも反対した。終幕近くで Long Day's で、Mary が幕切れで娘時代を回想するのと同じように、Nettie も、“Who loves you, Nettie?” ... “You do, Papa.” “Why, Nettie?” ... “Because I’m a nice girl’ Papa.”²⁰⁾ と、父親に可愛がられた娘時代への回想にふけるのである。

女性が結婚後も an adult married woman へ脱皮出来ずに少女時代をあこがれ、親の家をなつかしがる傾向は文学・演劇のヒロインにはまれではないかも知れない。しかし、女性の地位が高く、女性の社会の各分野への進出が盛んであり、家庭においても優位な地位を占めていると考えられているアメリカにおいてこのようなヒロインを見出すことは興味がある。

Yale 大学の社会学者 John Sirjamaki が The American Family in the Twentieth Century と題する著書で説明するところによると植民地時代のアメリカにおいては、女性は主婦として、子供の養育、家事、農作業など重要な役割を担っていた。ヨーロッパなどの余裕のある地域における主婦よりは、生存のために家族の生活をきりまわす努力を一層しなければならなかった。特に農業経済の社会においては主婦の家庭内において占める地位は大きいものであった。全ての家族の成員から信頼される主婦像があり、彼女を中心とする home があったのだ。経済構造の変化は家庭における主婦の役割をかえてしまった。かつて主婦の重要な役割りであった子供の教育は学校がしてくれ、近代的な家庭では、主婦が夫の仕事を助けることはまれであり、新しい電化器具は主婦を家事労働から解放した。主婦は、家族の存続に不可欠な存在から装飾的存在になってしまったのだ。例えば O'Neill の Desire Under the Elms にみられる農家の労働力としての母、こきつかわれて死んだ後も、その母性的な力が一家をおおっていたあの母親像は Long Day's の Mary にはみられない。Mary には一家の主婦としての自覚が欠けている。というよりも主婦としての役割をはたす home を与えられなかったといったほうが正しい。Mary は自分に home がなかったことについて、“It was never a home. You’ve always preferred the Club or a bar-room. And for me it’s always been as lonely as a dirty room in a one-night stand hotel. In a real home one is never lonely. You forget I know from experience what a home is like. I gave up one to marry you — my father’s home.”²¹⁾ と回想している。満足な home と名のつくものを与えられずに旅興行の安ホテルで生活をしなければならなかった Mary が少女時代を過ぎた父の家をあこがれるのは当然だろうし、かつての妻の重要な役

割りであった“home 作り”の仕事を奪われた女性が立派な主婦になり得ないのも当然であった。

社会的構造の変化により、かつての主婦の役割を奪われた（解放されたといった方が正しかも知れぬが）現代アメリカ女性は何を求めて結婚するのだろうか。現代社会で幸福を求めることは難しい。が、その幸福を求めて結婚するのだと Sirjamaki はいう。かつては、生存の必要から結婚したのだったが、現代では夫の愛情につつまれたロマンチックな幸福を期待して結婚するのだ。しかしそれは望みが大き過ぎると Sirjamaki は続ける。

At best their happiness and fulfilment are hard to attain under any circumstances, and to expect that they can be attained largely through marriage is to place a heavier burden of responsibility upon the family than it can sometimes bear. Since they have hoped so much from their marriage its failure must inevitably hurt them seriously, and they are therefore more prone to dissolve their union now than in earlier times when the stern necessities of life forced them to give first consideration to their survival instead of to affection.²²⁾

Mary は夫との生活にかけたロマンチックな夢を破られ、出産時の医師の下手で知った麻薬による幻覚現象の中に、現実の結婚生活からの逃避場所を求めたのであった。Gilroy の劇の Nettie は娘時代、法律事務所に勤めるなど社会性もある女性だった。結婚後の生活の味気なさに耐える方法として、実家へ頻繁に出入し、片輪の甥に読み書きを教えるなど O'Neill のヒロインよりも強さがある。そしてその生活に耐えられなくなったある日、貯めた小銭をもって家を出た。そして十二時間の後に夫と息子の待つ家へ帰ってきても、何処へ行ってきたともいわない。ただ “In all my life, the past twelve hours are the only freedom I've ever known.” というのだった。Mary が特殊な女性の特殊な経験といえるのに対して Nettie の場合はごく普通の女性の結婚生活の不満の表現として多くの女性に共感をもたれるだろう。この現代女性に共通な結婚生活の不満について現代のアメリカのように夫婦だけの少家族においては必然的なものと先にあげた Sirjamaki は社会学的立場から、次のように分析している。

By their marriage husband and wife create an intimate community of two persons within which they gratify their desire for marital happiness and companionship. They are constantly and continuously together, therefore always reacting upon each other ... But their very closeness in marriage also places a strain upon the constancy of their love. Inevitably they must sometimes disagree in small or large matters, since they are unique persons whose basic relationship is antagonistic cooperation. They can keep conflict between them controlled but never completely eliminated. When it flares up,

even briefly, it may disaffect their love and, when prolonged, destroy it. Should this happen, there may be few other forces to hold their marriage together: perhaps inertia, or mere determination to stay married.²⁸⁾

Nettie と John の夫婦の関係は antagonistc cooperation の典型的な例であるといってもいいだろう。反目しながら共に生活して行くのが現代の夫婦の姿であるとすれば Cleary 夫妻はまさしくその代表的なものである。Nettie は十二時間の家出の後に、やはり家へ帰った。何故帰ってきたと問われて、“I’m a coward.” と答えるのだった。婚姻生活を続ける要因が“臆病”であるというのは、Sirjamaki のあげる inertia を端的にあらわしている。多くの女性が結婚生活に不満をもちながら、その生活から飛び出すだけの勇気をもたないために現状にとどまっているとしたら、Nettie の行動はその人達の共感をよぶことだろう。

Nettie Cleary も、Mary Tyrone と同じく、アメリカの社会構造の変化によって、主婦の座を追われ、女性が home の中心であった時代をあこがれるアメリカ女性の姿を表象している人物であるといっても良いだろうし、Mary よりももっと現代的な姿において、現代のアメリカ女性、特に主婦の結婚生活における苦悩を象徴している人物といっても、あながちこちづけではないだろう。

父 John, 母 Nettie の立場を中心として The Subject Was Roses がアメリカ社会・歴史の表現としての意味を説明してきたのであるが、次に息子 Timmy を中心に世代差の問題を考えてみたい。この劇における親子の意識の差、世代の差が、Harold Clurman が O’Neill の Long Day’s Journey について認めたようなアメリカ史における世代差を表象しているかどうかを考察してみようと思う。Clurman は先にあげた東京での講演で「この芝居はアメリカの歴史を物語っているように思われます。古今東西常に問題になって来た世代の相違がこの芝居にも主題として登場してくる。若いオニールの父に対する憎しみという形で、この世代の差が扱われている。」と述べている。アメリカは移民の国であり移民してきて、二世三世と生きてきた人々が、現在のアメリカ合衆国を形成しているのとは周知の事実であるが、この歴史的事実が世代差を生み出しているのである。アメリカ史における世代差は移民達に経済的に余裕の出来た十九世紀に顕著になった社会的現象であると Sirjamaki は先にあげた著書の中で次のように説明している。

The great improvement in the status of children that occurred in the nineteenth century was due in part to the social and political democracy that matured rapidly in this period and everywhere liberalized social relations ... the steady expansion of the economy and increase in private and public schools had greatly enlarged the opportunity ... Children attended schools more generally and for longer period of time each year. thus acquiring education often beyond that of parents, which inevitably resulted in

betterment of their position in the family ... Despite these large strides forward in children's behalf, not all is well with them in family and society. The strong stresses upon their individualization bring them inevitably into conflict with parents, ... In infancy, children are, of course, largely on the receiving end of such affronts as parents make on them. Thereafter, more particularly with adolescence, the impulses for independence stir powerfully in them and they erupt into aggression against parents for what they believe to be onerous restrictions upon their burgeoning spirits. It may also be that they, or their parents, now strive for success so hard that they find the other a handicap to carry.²⁴⁾

アメリカにおける世代差は、移民という苦難を強いられる世代と、その後に来た急激な経済的発展の時期に生れた世代との間におこる必然的な現象であった。この世代間の争い、理解の欠如は社会的に大きな問題を今日迄のこしており、そのために現在の不安定な家族関係にアメリカ人は甘んじなければならないのだと Sirjamaki は極論しているのである。

Long Day's Journey では、この世代差は息子達の父親に対する憎しみという形であらわされていることは先にも書いた。名優として大いに金をもうけたくせに、しみたれ屋で一銭の金でも子供や妻のためには使わない父親。息子達は父のケチのために母親も病気になり麻薬患者になったのであり、弟息子 Edmund の結核も治らないのだと父親を責めるのだった。父親は父親で自分の出来る範囲で最大限の努力を子供のためにしているにも拘らず酒や女に身をもちくずした長男、病弱の次男に憤りを感じる。この父親が息子に自分の移民としての苦労話をいろいろ話してきかせる。貧困であった少年時代のこと、この貧困との戦いを通じて、金の値打ちにとらわれるようになったことなどを話し James Tyron は “It was in those days I learned to be a miser. A dollar was worth so much then.”²⁵⁾ とケチになった理由を理解させようと努めるのであった。その苦労話を聞いているうちに息子 Edmund はこの父の辛さをしみじみと理解する。そして自分が憎んでいる父親でありながら、そういう父の苦闘の結果を甘受している自分に気づくのであった。父親の悪口をいう兄に対して “Oh, Papa's all right, if you try to understand.”²⁶⁾ と弁護するようになるのである。

Clurman は先にあげた講演でこの世代間の理解こそ大切であると次のように話している。「なぜ父がそのようなならざるをえなかったか、それを理解してやり、そして、やがてはそういう父であるにもかかわらず、父は偉大な父であった。立派な父であったという認識へ至る。そういう認識がこの芝居の幕切れである。これが重大な点だと思う。」²⁷⁾

この子供の父親への理解は、少々大げさにいえば、アメリカ史の認識の始まりともいえる。父親の姿を通して、自分達の生れた国への認識もでき、移民の国なるが故に宿命的に家族内に生じる世代間への対立への理解とその解消への努力にもつながるのである。この世代間の理解はアメ

リカにおける家族制度の再確認であるといってもよい。というのは、世代間の理解が欠け、子供が家庭に対する愛着を失うことは、Sirjamaki も “Children who lack family sentiments or are in revolt against their families will not themselves found strong and durable families since they have no solid basis upon which to build.”²⁸⁾ といっているように家族制度の危機を意味するからである。

The Subject Was Roses における世代差とその理解はどのような意味をもっているのだろうか。Timmy の場合は三年間の軍隊生活が親を理解するための準備期間の役割をはたしている。戦争に行く前の Timmy は両親の過保護のもとに育てられた病弱な少年であった。病弱であった彼は学校も休みがちであった。しかし軍隊に入ってから病氣一つしたことはなかった。そして自分の病氣の原因が父母のいさかいにあったことに気づくのだ。

父が飲みあるいて帰らない夜のことを Timmy は次のように話すのである。

“All those night I lay in bed waiting for your key to turn in the door. Part of me praying you'd come home safe, part of me dreading the sound of that key because I knew there'd be fight ... All those mornings I woke up sick. Had to miss school. The boy's delicate, everyone said, has a week constitution.”²⁹⁾

父母の不仲が自分の病氣の原因であることに気づいた彼は、父母の不仲の原因を余裕ある立場から考えることができた。ある程度、成人への脱皮の準備を終えて帰ってきた Timmy を迎えたのは、昔のままの両親であった。ケチで怒りっぽい父、その父を理解しようとしなくて自分の実家へ入りびたっている母、その両親は昔そのままの扱い方で Timmy に接するのであった。母親はあれほど好物であった waffle を忘れてしまっている息子に失望し昔のように世話をやかしてくれないことを悲しむ。父親は、酒の相手になるまで成長した息子に誇りを感じながら、自分の思うように動かなくなった Timmy に憤りをも感じるのだ。

Timmy はこの両親の間にたって、不和の解消にいろいろ心づかいをみせるのである。バラを買って父からの 贈り物として 母を喜ばす方法は殆んど成功 したかにみえたが、母親の sexual chastity にわざわざされて失敗した。戦争に行くまえには、父親がわるいと思っていた。だが、今は次第に父親一人がわるいのではない父親を理解しようとしなくて母親に罪があると思えてくるのであった。そして二人して父親を責めるのはやめようと母をたしなめるのであるが、そのため母が家出をする にいたって 母親の心の 悩みも理解 されてくる のである。Timmy は母親に “When I left this house three years ago, I blamed him (father) for everything that was wrong here ... when I came home, I blame you ... Now I suspect that no one's to blame ... Not even me.”³⁰⁾ と述懐するのだった。誰もわるくないのにうまくいかない “家庭” というものの本質を Timmy は理解したのだ。彼はもうすでに、この家を出て生活することを決めていたのだ。現代人は “家族” という関係を絶ち切って生きねばならないという自覚をもつたのだ。

Robert Brustein が Strindberg の Dream play から引用して “... in which I cannot move without injuring the happiness of others, in which others cannot remain happy without hurting me.”³¹⁾ といっている言葉があてはまるような家族の関係、一人の動きが他の人の幸福を奪わずにおかない家族という関係からの脱却を求めたのだろう、父親は、自分の Timmy に対する扱いがわるいから彼が出て行こうとするのだと思い込み、あらゆる条件を出して引き止めようとする。この話し合いの間に、父親は息子が本当に自分を愛してくれているのだと感じ、息子が出ていく意図をも理解出来る。そして快く息子を送り出してやるのだ。息子の出ていったあとでは、夫婦という antagonistic cooperation の関係にある二人が、お互いに傷つけ合いながら共に生きていかねばならないのだろう。

O'Neill の Long Day's Journey の場合は、初代移民の苦悩を二代目が理解することに意義があった。Gilroy の The Subject Was Roses では親子二代を含めた家族というものが成立し得ないことを、家族という幻想にしがみついている古い世代が理解するところに意義があるのだ。O'Neill 劇の家族はお互いに傷つけ合いながらも愛情という絆に結ばれていた。愛というくもの糸にもたとえられる絆にがんじがらみに結ばれているがゆえに、お互いの苦悩も深く、又憎しみも一層はげしさを増すのであった。お互いが理解し合わない限り、この閉鎖された単位の中では生きていけないのだ。理解し合っても家族という単位の中でうごめいている限り救いはないのかも知れない。だが子供が親を理解することは、この家族体制の再確認を意味するのであった。Long Day's Journey into Night は家族崩壊の悲劇ではない。家族の絆を絶ち切れぬがゆえの悲劇であった。

Gilroy の劇の家族には、憎しみの激しさも悲劇性もない。たしかに親は子供を愛し、子は親を愛している。しかし真の愛が確認されたときに、子供はすでに家を出る決心をしていた。夫婦の間の結びつき、心の交流が不可能に近いこの家族では、夫婦のくさびを子供に求めた。だがそれは幻想に過ぎなかったのだ。現代では親と子を含めた家族はもう存在しえないのだ。古い世代はこれを理解しなければならなかったのだ。

では現代という家族崩壊の時代に生きる“家族”はどのような形をとらねばならないのだろうか。ここに Edward Albee の Who's Afraid of Virginia Woolf? に描かれる大学助教授夫婦の姿が想いだされる。この劇では実在の子供にかわって「想像上の子供」が登場するのである。実在の子供でありえないところに現代的な意味があることは、前記の The Subject Was Roses の Timmy が家を出る事情から明らかであろう。この劇の Gorge と Martha 夫婦はお互いに相手の心を傷つけあうことによってのみ心が通い合える夫婦である。Tyrone 家の夫婦が愛情に支えられ、特に夫 James の保護によって保たれているのに対して、Cleary 家は全く理解のない、対話のない、諦めの、そして子供を通してのみ結ばれている夫婦としたら、この Albee の劇の夫婦は傷つけ痛め合うことによってのみ存在できるカップルなのである。もはや自己の意志をもった次の世代を生み出すにはあまりにも不毛であった。この不毛のゆえにこそ子供を invent す

る必要があったのだ。Lee Baxandall はこの点を次のように述べている。

With the child, George achieves—if only in fantasy— his crazy wish to perpetuate history “in spite of history” and to keep it under his control. The fantasy-baby gives Martha some one all her own, to use any way she wants, just as countless women have used their actual children.³²⁾

歴史学の教授である George は歴史の展開に絶望しながらも、子供を通じて歴史の永却性を確認したかったのであろうし、一個の人間 George にとっても、子供は継承者という意味で自己の永遠性を保つために必要なものであるだろう。又 Martha にとっては、自分の思いのままになる愛玩物としての子供が必要なのだ。この想像上の子供は Albee や Gilroy の他の作品にもあらわれるもので、アメリカ家庭の不毛さと、その不毛からの脱出を願うアメリカ人夫婦の願望の象徴とも考えられるのである。

The Subject Was Roses は一見軽快なタッチの喜劇であるかの如き印象を与えながら、家庭の変質を暗示し、Albee の描く不毛の家庭と、O'Neill の描く愛情という絆でがんじがらみにしばられているために悲劇の場となる家庭との間の移行の経過を説明する役割をはたしているのである。これは単に家庭だけの問題ではなくアメリカ社会の変遷の過程の表現といってもよいだろう。Albee の劇にあらわれる不毛さは大多数の観客には自分達がまだ知らない未来の家庭像であるかもしれないが、Gilroy の家庭は自分達に身近かな家庭であり、そこに描かれる諸問題は自分達が今直面しているものであった。この劇があればほど長く興行を続けることが出来たのは、この劇が暗示している家庭の崩壊に多くのアメリカ人が意識的に、あるいは無意識的に共感をもったことを意味してはいないだろうか。

私はこの小論で、The Subject Was Roses の登場人物 John, Nettie, Timmy をそれぞれ、歴史的、社会的意味をもった “culture figure” であることを立証しようと努め、不十分ながらも John を中心とする Irish-Catholicism の特性を表現する cultural document であること、Nettie により表現されているアメリカ家庭における主婦の座の変化と女性の結婚への不満、Timmy を中心とする劇的展開は家族の意味の変遷を表象していることの三点を説明し、アメリカ演劇の優れた作品がもつ一要素である歴史的、社会的意味をこの Gilroy の劇も備えているのであり、ピューリッパ賞受賞作として恥しくない作品であることを論証したつもりである。

いうまでもなく劇の評価は、上演を見た人々に与える総合的劇効果によるべきものであって、この小論のような分析は邪道であることは否めない。ただ、私がニューヨークで、Ulu Grosbard 演出の公演をみたとき受けた感銘の跡づけとして、少々こぼつけの傾向のある分析をしたことをつけ加えて御寛恕を乞う次第である。

註

- 1) Arthur Miller, "The Shadows of the Gods," (*Harper's Magazine*, August, 1958)
- 2) Arthur Miller, "The Family in Modern Drama," compiled in *Modern Drama* ed. by Travis Bogard and William I. Oliver (New York, 1965), p.223.
- 3) John Henry Raleigh, "O'Neill's Long Day's Journey into Night and New England Irish-Catholicism," compiled in *O'Neill* ed. John Gassner (Englewood Cliffs, N.J., 1964), p.125.
- 4) Henry Popkin, "Arthur Miller: The Strange Encounter," compiled in *American Drama and Its Critics* ed. by Alan S. Downer (Chicago, 1965), p.231.
- 5) Arthur Miller, "The Family in Modern Drama," pp.223—229.
- 6) Frank D. Gilroy, *The Subject Was Roses*, (New York, 1965), p.192.
- 7) Eugene O'Neill, *Long Day's Journey into Night*, (London, 1958), p.128.
- 8) O'Neill, p.127.
- 9) O'Neill, p.128.
- 10) O'Neill, p.110.
- 11) Gilroy, p.178.
- 12) Gilroy, p.206.
- 13) Raleigh, p.133.
- 14) Gilroy, p.145.
- 15) Gilroy, p.172.
- 16) Raleigh, p.131.
- 17) Gilroy, p.176.
- 18) Gilroy, p.177.
- 19) Raleigh, p.135.
- 20) Gilroy, p.201.
- 21) O'Neill, p.62.
- 22) John Sirjamaki, *The American Family in the Twentieth Century*, (Cambridge, 1953), p.54.
- 23) Sirjamaki, p.102.
- 24) Sirjamaki, pp.110—111.
- 25) O'Neill, p.129.
- 26) O'Neill, p.138.
- 27) Harold Clurman 「オニールの人と芸術」 沼沢治治訳『新劇』1968年11月号
- 28) Sirjamaki, p.134.
- 29) Gilroy, p.188.
- 30) Gilroy, p.201.
- 31) Robert Brustein, *The Theatre of Revolt*, (Boston, 1964), p.351.
- 32) Lee Baxandall, "The Theatre of Edward Albee," (*Tulane Drama Review*, Vol.9, No.4, Summer 1965)